新しい働き方を考えるシンポジウム
～まちづくりと市民による仕事おこし～

神野直彦先生の記念講演

2003年12月13日（土）に神奈川県地域労使就職支援機構の主催（日本労働者協同組合連合会センター事業団共催）で行われた「新しい働き方を考えるシンポジウム」での神野直彦先生の記念講演を協同総研としてまとめたものを掲載いたします。（編集部）

学問の効率化？

国立大学の独立行政法人化は、世界の大学にとって議論を巻き起こしております。イタリアの大学協会は「独立行政法人化した大学は大学として認めない」と言っております。私立大学でも経営する理事者と、学問の自治・大学の自治というのは明確に分離するものなのですが、日本では未分化です。

これは最終的に私たちの発展を否定する。毎年おそらく4%から5%ずつ、自動的に大学が効率化したものと見なして、予算が削減されていくのですが、学問というのは、「同じ予算で最大限の成果を」ということはできますけれども、コストを削減していくような形ではできません。

学問はもともと無駄なんですね。例えば私どもは結核など様々な病を克服しました。そのときに、非常に大きな威力を発揮したのが抗生物質でした。これは、基本的に「必要なときに薬を作ってくれ」というように作られるものではありません。カビばっかり研究している人が「カビのまわりに、なぜ細菌が繁殖しないのだろう」ということからヒントを得て作られたのが抗生物質です。そうした例を挙げればキリがありません。2年なり3年なりで業績評価をすると「こんなカビをみている人間なんていうのは必要ない」なんて削られて、それでは学問そのものが成り立たない。金儲けのためにインセンティブを働かせれば学者は新しいことを発見するか？というと、発見しません。

自然破壊と自然の逆襲

働くということも同じことですね。私が大学を出たときは、東大闘争で大学院入試がなかったのでそのまま企業に行きました。そこで私は、工員とまったく同じように1年半働かせてもらいました。組み立てラインでずっと働いてきましたし、セールスマンのチームにも入っていました。あらゆる労働を経験しています。

「インセンティブを与えれば働く」というのはウソです。「お金を増やしてやるから働け」っていうのが通じるのは、最低限の生活が維持できなくなっている人だけです。それを突破したら、お金をいくら上げていっても働く意欲というのは全く失われます。

ローマ時代には奴隷を「動力源」として使っていたように、人間は「人間を非人間的に使用する」ということをやってきましたが、これをどうにか人間的な労働に変えていこうというのが人間の歴史です。私たちは今、かなりの地球環境の制約にあたっておりまして、これを突破しなければなりません。人間は自然を滅ぼすことは絶対に出来ません。人間は、自然を人間にとって有用なものに変形して、人間の生存にとって都合がいいものに変えていくという行為によってしか、発展はないのです。自然が存在する限り人間が発展することはできるけれども、自然が無くなれば人間は発展できなくなる。自然は自然を守るために人間を滅ぼします。古代文明は自然破壊によって自然からの逆襲で滅びていくわけですね。

ばい菌というのは寄生主と共生していますから、ペスト菌は野ネズミを絶対殺しません。ところが、このばい菌を野ネズミから追い出して、人間がペスト菌をもらうと、人間は寄生主ではありませんから、殺します。伝染病というのはすべてそうです。別な生物に寄生していたばい菌を自然破壊によって追い出して、人間がもらうんですね。インフルエンザもそうです。香港が家畜の集散地になっておりますので、その家畜についていたインフルエンザの菌を人間がもらうわけです。そして「香港型」とか「ソビエト型」とかいうわけです。おそらく、SARS もAID s もそうですよ。何らかの形で何かの生物と共生していたものを、人間が破壊して追い出して…。人間が自然を滅ぼす前に、自然が人間を滅ぼしていくのです。

労働の二つの意味

人間の労働というものは、自然に働きかけるものです。重要な点は人間は群居性を持っているんですね。協同して自然に働きかける、これが労働です。すべての人間がそうですが、労働には個別的な意味と普遍的な意味を持っている。

例えば、玩具職人は、自分の生活のためと同時に他者のため、子どもたちのために玩具を作っている。職人たちは、子どもたちの顔を思い浮かべながら、玩具を作っているのです。労働というのは、他者のために自分が何を貢献しているのか、ということを考えながら、自己の生活を維持していく。必ず人間の労働というのは二つの意味を持っています。この「他者に対してどういう意味があるのか」っていうことが見えなくなってくると、労働はまったく無意味な、意味のない、やる気のないものになってくるのです。

もしも、これ以上環境破壊が出来ないので、原子力発電はやめて人力発電にしようとしますね。人間をベルトコンベアの上に乗っけて、ハツカネズミのように走らせる、そうして発電機をどんどんドンドン回すと、非常に自然に優しいわけです。そして、賃金を上げていき、その人の生活を維持できるレベルまでいって、それを超えたら、この人はいくら上げていってもやる気を失って、アウトセンティブ、離職に向かいます。

その代わりに今度は、私たちの成熟した社会では「この労働をやってくれたらお金を取るぞ」と言えば、みんな喜んでやる。ウソだと思ったら、スポーツクラブに行って

みてください（笑）。お金を払って労働をしているわけです。あれは無駄ですから、発電機を回させれば良いんですよ、米をつかせるとかですね（笑）。なんでそれをやらないのか…。もしも、あの、わざわざ汗の出るようなのを着てやっている人に対して「あなたたち、この発電機を回してくれたら、1時間について100円出します」とか「1000円出します」とかやっていったら必ず止めてしまう。

なぜかと言うとこれは、実に簡単なことで、この人は自分のやっていることの意味が分かっているんです。人から与えられたことではなくて、自分は何のためにこれをやっているのか、意味が分かっている。お金のためじゃない。

それからもうひとつ、労務管理の上で重要な「目標による管理」というのがあります。他人が目標を設定したのではなくて、自分が設定した目標だとやる気になるんです。つまり、人は、体重を何キロ減らすとか、1週間に体脂肪をいくつ落とすとか、自分で目標を設定して、そのために少なくとも1週間に2回はトレーニングやろうと、自分で目標を立てているんです。そうすると、やる気が出る。お金をもらった瞬間に、やる気にならない。やる気を失う。我々だってそうですよ。金のために学問やっていたら、絶対やる気を失います。金のためっていうのだったら、別のことやります。ところが、現在の日本の社会では、原因と結果、手段と目的が転倒して考えられるようになりました。

生きるために仕事をする？

『人間回復の経済学』という本を書き始めた契機のひとつは、1997年から98年にかけて、自殺者が1万人増え、3万人の大台を突破したことです。それからずっと3万人の大台を突破したままであるということは、みなさんもご存じの通りです。この97年から98年で、なぜ1万人も自殺者が増えたのかというと、この97年に金融破綻があったんですね。金融破綻が起きて、倒産と失業者が相次いで、自殺者が増える、ということです。この97年から98年にかけて、日本は自殺によって平均寿命を短くしてしまうという、人類史上かつてない「快挙」を成し遂げています。

私はフランスの上院に呼ばれて講演をしたのですが、そのときに、フランスの議員たちから「わがフランスの国民は生きるために仕事をしている。日本では仕事で悩んで自ら命を絶っている、と聞くけれども、日本人は生きるために仕事をしているんじゃないのか」という質問が出されました。日本人はごく当たり前の原理というのを、忘れ始めたのではないでしょうか。

ただ、「いいこと」もあります。何かというと、この自殺をした人々の多くは、私たち団塊の世代の男性なんですね。失業率は確かに若い人たちも高いのですが、有効求人倍率が中高年層で悪化していますので、中高年層の場合には、一度失業すると次の就職先がない、そういうことで自殺に結びつくことがあります。しかももうひとつ重要な点は、日本の社会には「ジェンダーバリア」というのがあります。女性は自殺しません。日本での重要な点は、女性も自殺に「共同参画」していけるような社会をつくらなきゃダメですね（笑）。自分1人生きていくということであれば、そんなに悩んで自殺することはないんです。家族のことを思い浮かべると自殺しちゃう。これ、ジェンダーバランスが大事です。

ご存じの通り、将来不安の重要な原因は、年金の改革をどうするかということです。年金がいつ破綻するか分からないので将来に備えて貯蓄をして消費を控えるからモノが売れなくなる、ということが起きているわけです。では、年金はどうして破綻するのか、それは私たち団塊の世代が、年金の受給者になったときに、年金の財政が破綻するんじゃないか、ということですよね。ところが、このまま3万人ずつ死んでいっていただけるのであれば、克服できる道がある。早く死んでいってもらいたいということですよね。

結婚しない若者が増える社会

しかし、そうは問屋がおろしません。それは、年金を破綻させていくもうひとつの要因として、少子化があるんです。少子化が高齢化を生むわけです。出生率は今1.3にまで落ち込んでいます。しかし、出生率が落ちてはおりますが、有配偶者・結婚している女性はずっとこの20年いつも2.1ぐらいで出生率を落としておりませんでした。出生率というのは、出産可能な女性が何人子どもを産むかということです。2.0ほどあれば、人口は減少しません。なぜ出生率が落ちるのか？結婚しない女性の存在です。20代、30代の女性の半分以上が「結婚したくない」「結婚しなくてもいい」「結婚に魅力を感じない」と言う。じゃあ、どうして結婚したくないのかと聞くと「子育ての負担に耐えられないから」というのが第1位なんですね。第2の理由は「仕事と家事との両立ができない」。これは「両立支援サービス」をちゃんと地方自治体がやっていないんですね。

ところが、現在では20代30代の男性で「結婚したくない・結婚に魅力を感じない・結婚しなくても良い」という人が増えている。つまり、女性だけが結婚を拒否しているのではなくて、男性が結婚を拒否している。20代30代の男性になぜ結婚したくないんですか？と聞くと、75%と圧倒的多数の人が「結婚の経済的負担に耐えられない」というんです。それはそうですよね、ひとつ前の世代をみてもらえれば、みんな自殺しているんですから。「愛か死か」「この女性のためなら死ねる」と思わないと結婚できない。愛情が試されている。これ、不況の良い所なんですね（笑）。学生は勉強するようになる。まじめに愛情を語るようになる。打算で結婚はできないってことですよね。

いずれにしても、男性が結婚しないと出生率は落ちますから、年金が破綻するんです。そうすると、―今や貯蓄もできないような状態になっているんですが―できるだけ将来不安に対応して貯蓄をして、モノが売れなくなるんですね。売れなくなると当然ですけれども企業が可能な限りコストを下げようとして、人件費を抑えるためにパート労働、つまり不正規従業員を増やす。不正規従業員というのは、社会保険に加入しませんから、社会保険財政は空洞化していきます。社会保険は頼りにならなくなるんですね。現在失業者の生活を支えている第1位は、預貯金の取り崩し、第2位に失業保険、第3位が親族間のやりとりですよ。貯蓄していないと、モノを買わないでいないと生きていけないんです。こういう社会になっているということです。

ライフスタイルの見直し

モノは買わない方が良いですよね、ハッピーになりますよね、例えば、今年の夏、ヨーロッパでは熱波がすごく、何人も死んでしまった。ヨーロッパでは湿気がないの

で、クーラー入れていないんですよね。

日本はクーラーをつける。クーラーをつけるから、木を切れるんです。日本の神道では木を切ることを禁止しています。井戸を埋めることもできません。森と水、この二つが日本民族にとっては最大の、守らなくてはいけないこと、だから宗教的にタブーにするんですよね。インディアンの宗教も同じです。様々な自然に様々な神々が宿る、それを切ることは禁止されているんです。高温多湿の日本でも、大木のそばにいれば、なんだか涼しいんですよね。日本の場合には広大な庭を造って、そこに本当に粗末な家を建てるというのが本来のすごし方です。

横浜でも東京でももしもクーラーがなかったら、日本の夏って言うのは、熱波がきた今年のヨーロッパの夏どころではないですから、バタバタと何万という人が死んでいるはずです。何で生きているのか、それはクーラーがあるからです。それからみんな水を暗渠にしてしまう。この間ドイツの首相が来て「何で日本人は美しい川や美しい海を見られなくするのか」と言っていましたが、川というのは自然のクーラーです。水が熱を取って運んでくれるんです。ところが暗渠にする。これはクーラーがあるから自然破壊ができるんです。自然破壊をされたら、クーラーないと生きていけませんから、クーラーがいる。悪循環です。

私は網膜剥離ですので、テレビは観れません。人間の瞳孔というのは自然光、つまり「全体の明るさ」にしか反応できません。今この段階ではみなさんの瞳孔は開いているんですね。瞳孔が開いているときにテレビを観たらどういうことになるか、網膜に穴をあけるんです。観ない方が良いんですよ、あの光源は。モノは考えなくなるし、もっと自然の中に入って、読書した方がよっぽど良いわけですから、テレビも必要ないですね。

それから冷蔵庫。これももう必要ないんじゃないかと。冷蔵庫を廃止したらどういうことになるかというと、井戸を掘って冷やすわけですよね。で、井戸で冷やす程度でもつような食べ物を食べた方が健康にいいんですね。冷凍食品とかああいうモノを食べていたら、長い目で見たら健康を害するに決まっているんで、これもやめた方がいい。新鮮な食材を使うということをやった方が良い。そうすると日本の農業も復活してくるわけです。冷蔵庫を使った食生活・食文化はやめる。

歴史の大転換点

かなりの雑談をしてきましたけれども、ここで言いたかったことは、私たちは今、大きな歴史の転換点にさしかかっていると言うことです。この歴史の大転換期には、重要な社会的・経済的・宗教的・政治的問題に関して公式の考え方を文章にして必ずローマ法王が回勅「レールム・ノヴァルム」を出されます。現在のヨハネ・パウロ2世が1991年にレールム・ノヴァルムをお書きになったときに、私ども（東京大学）の名誉教授でいらっしゃる宇沢弘文先生に相談なさいました。そこで宇沢先生は今回の「副題」は「社会主義の弊害と資本主義の幻想」であると提案されました。ヨハネ・パウロ2世の祖国ポーランドは非人間的な社会主義の抑圧に苦しんでいたけれども、それから解放されたとたんに人々は市場を万能であると信じていたんですね。それは祖国を非常に不幸にした。

その前のレールム・ノヴァルムはちょうど100年前、1891年にレオ13世がお出しになっているんです。このレオ13世のレールム・ノヴァルムの副題は「資本主義の弊害と社会主義の幻想」です。19世紀末は世界的な大不況で1873年にウィーン株式市場が暴落しました。その後、世界的に現代と同じようにデフレーションが起こります。1896年まで物価が下がり続ける。この中で失業者が増えていき、倒産が相次いで「資本主義の弊害」というのが明らかになってきた。人々の中には「社会主義になればこういう問題は解決するはずだ」「社会主義になれば人間は救済されるんだ」という人がいるけれども、それは幻想にすぎないというのがレオ13世のレールム・ノヴァルムだったんですね。

この前の歴史の転換点というのは第2次産業革命といわれている時代で、軽工業の時代が行き詰まって、重化学工業になる時代でした。しかし、鉄工業などは繊維機械などの一回限りの需要を満たしてしまうと、もはや過重設備を抱えて、そして不況にあえぐという時代を迎えます。1896年から好況に転ずるのは、軍艦の建造競争です。その結果不幸なことに1914年に人類は第1次世界大戦という「トータル・ウォー」つまり総力戦に入っていくのです。しかしその過程で人類は重化学工業を牽引していく2つの戦略産業を手に入れます。ひとつは自動車、もう一つは家庭電化製品です。

自動車と家庭電化製品というのは、人間にとって初めて経験するものでした。それは自動車、電気洗濯機を考えていただければ分かると思いますが、人間の手や足という運動系統の機関が、独立したメカニズムになったものを作り出した、ということです。それをライフスタイルに取り入れていくようになると、私たちの新しい重化学工業の時代が有機的に関連しはじめて、鉄工業石油化学工業がまわるようになってくる、そういう社会です。

現在私たちは今、いよいよ重化学工業が行き詰まっている時代に生きています。そして私たちは、人間の手足の延長線ではなくて、人間の神経や頭脳の延長していったものが、独立したものになるのを作ることができるようになってきました。「知識社会」といわれている時代です。

「公」の思想

日本には「公（おおやけ）」の思想がありません。「公」というのはなにか、「公園」というのは、ドイツの文学者ゲーテがつくりました。ゲー

テは、封建領主や貴族が独占している美しい庭園を、すべての社会の構成員に開放性よと主張して「公園」を主張しました。そのゲーテの思想に共鳴した世界の諸国民が、すべての学術を社会の構成員に開放しようとして、博物館をつくる。すべての社会の構成員に美術を開放しようとして美術館をつくっていく。ソーシャル・インクルージョン＝誰もが排除されないで参加することができる、これが「公」といわれるものです。

日本人はこれを完全に忘れていますから「民営化しろ」と言われて、博物館もみんな大学と同じように独立行政法人として真っ先に民営化されたんです。イギリスでも絶対そんなことはしません。大英博物館に行ってください。タダですよ。すべての社会の構成員が、排除されないで、開放されるもの、それが「公」っていうことです。

道も同じことです。道というのは、人間が交流する場です。人間が交流する権利を持っているんですね。ヨーロッパではしたがって、道と道が交わるところは、必ず広場になっている。そして、人間と人間が交流する権利を侵さない限りにおいて、自動車の通行を認めるんです。だから、街と街を結ぶ道はあまり人間が交流しないから、自動車が通っても良いけれど、街の中の道は人間が交流するのであるから、これは認めないんです。環境の問題だけで言っているのではなく、本来の「公の思想」があるからなんです。

道というのは子どもたちが遊び、そこのローセキでいたずら書きをして、創造性をはぐくむ場です。ところが日本でどういうことを教えていますか？「道で遊んじゃいけませんよ！」です。私のウチの側に「浦和レッズ」というのがあります。私は小さいときからサッカーは道でやってきた。みんな道でサッカーやってきたんです。ところが浦和では道でサッカーできなくなっていますから、浦和はもうサッカーの街ではありません。とんでもない話です。やれるところがない。子どもたちが遊べる場所がない。

それどころか、日本では学校に通学するのにも、子どもたちは全国どこに行っても命がけです。そんな馬鹿なことやっている国はどこにありますか。パリのシャンゼリゼに行ってもその路地のひとつ裏に入っていただければ、子どもたちが縄跳びをしたり、遊ぶ道がちゃんとありますよね、車が通っていない。日本では本来人間が交流する場は完全に奪われている。これに対して誰も異議を申し立てない。「公」という概念がないからです。

「公」の概念がないとどういうことになるか。絶対君主、王様がいて、道を「これはオレのものだ」と私的に占有していた。そして通せんぼして「金を払えばこの通せんぼをはずしてやるよ」と言ったんですね。これが有料道路です。この有料道路を持っているのは、日本とアメリカしかないですよね。日本は「公」がないものですから、「官から民へ」なんて言われて道で金儲けをしてしまう。

現在のイラクに派遣されているアメリカ軍は「民営化されている軍隊」です。戦うところは本当の軍隊が行っていますけれども、後方支援部隊は全部アウトソーシングされているんです。「民」でできることは「民」でというなら、なんで「民」でできているのに自衛隊を出すんですか。民間機を出したらいい。「タリバン」という政権はＮＰＯ中のＮＰＯ―あれは「義勇軍」ですから―である「アルカイダ」に民間委託して、褒められこ

そすれ、けなされる筋合いじゃないですよね。日本も「民間委託をしろ」と言うのだったら、合見積もりをとってやらせればいいじゃないですか。

ＮＰＯとか、市民組織とか、そうしたところでできないこと、市民が自発的にやってできないところを、政府が最終的に責任を持つというのは、当たり前の話ですよ。責任を持たないとどういうことになるかというと、「いやぁ、今“官から民”の時代ですからねぇ、民間で、ＮＰＯでやらしてやってくださいよ」と、みんな責任逃れする、とういことになるんですね。

産業構造の転換ができない日本

今私たちの時代は、重化学工業の時代から知識や情報の時代になってきているわけです。知識や情報の時代になりかかっているのに、日本はそれに対応して、産業構造を知識とか情報産業に転換することをやっていない、だから既存の産業で、コストの引き下げ戦争をやる。そうすれば中国に敵わない。当たり前ですよ。欧米の企業が何故強いのか、それはそうですよ、全部知識集約していますから。その地域に本当に優秀な人材いない限り、発展することはできません。

例えば、私の目は、レーザー治療ができない時代なら失明しているんですね。しかしレーザー光線というのは、日本製ではなく全部スイス製です。東京大学の医学部に来てください。医療の高額機器は全部スウェーデンです。日本は本当に必要なところ、私たちが本当に必要な医学の機器を、ひとつも作っていないんです。全部輸入でやっている。そんなことない、日本にも医療機器メーカーがあるじゃないか、と言われますが、日本がつくっているのはレントゲンや超音波など全部検査機器です。あんなので見つけられちゃうから、切らなくて良いものを切ることになったりするんです。

日本は大量生産して儲かるものしか作らないんです。今私たちが必要としているのは、大量生産・大量消費のものではありません。そういう時代は終わったんです。もう地球が持たなくなっているんです。重化学工業の時代は終わったんです。私たちはもっと違ったやり方でこの社会を動かさなくてはならないということに気がつかなければなりません。

農業の時代に、農産物を何で市場で動かさなかったのか。農産物というのは市場に適さないんです。生鮮食料品でも、日本人だけですよ、こんな食生活をやっているのは。ヨーロッパでは「何月にはどんなものを食べるのか」決まっています。食材というのは新鮮なものを食べますから、一体これはどこでとれたものなのか調べて、新鮮なもの、季節性と地域性のあるものしか口にしないんですね。スローライフ運動とかスローフード運動とかと言われていますが、ヨーロッパの学生たちがやっている「コーラを飲まない運動」「ファーストフードを食べな

い運動」を日本ではやらないんですね。

ヨーロッパの新しい社会経済モデル

スウェーデンで今の産業構造の転換をしようとしています。スウェーデンに限らず、ヨーロッパでは、アメリカの、粗野で、野蛮で、残虐な、自然破壊的な文化に対抗するために、新しいヨーロッパ社会経済モデルをつくろう、と言っております。アメリカというのは国民国家ではありません。様々な民族の寄せ集めですね。人間の中には自分の価値観を相対化することができない人々がいます。自分の価値観がまちがっているんじゃないかと、ふと振り返って見直すことができない人がいる。その人々を、私たちは「アメリカ人」と言っている（笑）。そういう人々のつくった国です。

アメリカっていうのは、どん欲を7つの大罪として戒め、勤勉と倹約を旨とする理想郷をつくろうとして、清教徒たちが船で渡ってつくったわけです。船で渡った人たちはその大儀を全然わからなくなって、欲望に走り始めた。私たちは、船に乗る前の人々をスタンダードにするのか、船から降り立った人々をスタンダードにするのか、そういう選択ですね。

ヨーロッパというのはアメリカと完全に生き方を変えているわけですね。アメリカの文化よりヨーロッパの文化の方が優れている、というプライドがある。ドイツ人は「我々は不幸なことに第２次世界大戦でアメリカに敗戦し、アメリカの粗野で野蛮な文化を押しつけられた。しかし、アメリカにベートーベンはいるのか、カントはいるのか」という自信があるんです。

ヨーロッパは、雇用や福祉を重視してきたという良いところを生かしながら、新たな状況に対応する新しい社会経済モデルをつくろう、ということを考えている。ヨーロッパ社会経済モデルというのは、市場と協同組合、コーポラティブとかアソシエーション―ＮＰＯというのは日本しか通用しませんから―、ファウンデーションという利潤を目的としないものを中心とする社会のモデルを作り始めたということです。

今スウェーデンで行っている社会経済モデルは、失業者を中心にして「ローカル・デベロップメント・グループ」をつくります。仕事をつくる上で重要なのは、自分たちの社会に何が足りないのか、何が困っているのか、ということです。どこが儲かるかっていう話ではありません。自分たちが社会生活をしていれば必ずニーズがあり、生きていく上で必要不可欠なニーズに応えるために仕事ができるわけで、必要不可欠ではないもののために仕事をつくるわけではないんですね。だから、必要不可欠なものは何かということで、基礎的サービスといいますが、育児とか養老とか、広い意味での、家庭内で行われていたことを、ローカル・デベロップメント・グループという人たちでやっています。

もうひとつやっているのは、日本でいうと「公共事業」ですね。日本のように政府が一生懸命に公共事業をやりませんので、街づくりですよね。自分たちの街を、伝統的文化を復活させるような街にしようと。ヨーロッパでは「生活様式」のことを「文化」といいますから、生活様式＝文化を守れば、必ずその地域に地産地消で産業が出てくる。文化を崩せばダメですね。

例えばフランクフルトソーセージっていうのは、フランクフルトでしか作れないですからフランクフルトしか食べないという

ように、それぞれの地域の生活様式を守れば、それぞれのものができる。生活様式を守っているか守っていないか、それは街を観ればわかります。ヨーロッパでは伝統的な建物を守り残している。近代的な建物が建っているのは、アメリカを除けば発展途上国、日本を含めてみんな一極集中している。文化を忘れ、その地域の生活をしなくなった。

そうした新たな文化おこしをすると、観光が出てくるんです。それがひとつ。もうひとつは、知識や情報の産業というのは少人数でも能力さえあればどこででも簡単にできます。こうしたことをローカル・デベロップメント・グループがみんな作りはじめる。それを、芽が出てきて「これが次の産業につながるかも知れない」となったら補助金を出す。そういう政策をとるんですね。

恐れることはない

そういうような形態で行われていくことによって、新しい地域おこしが成功するはずです。人々は恐れる必要はない。なぜなら、今、ヨーロッパが理想とし、モデルにしているひとつにキューバがあるんです。日本は「失われた90年代」なんて言っていますが、キューバは日本どころではありません「崩壊の90年代」ですよ。ロシアからの援助がストップし、アメリカから経済封鎖がなされる。そして、輸入は「20%減」ではなくて「20%だけ」しかできなくなってしまったんです。そうするとどういうことが起きたのかというと、もう自動車はカストロ以外乗れません（笑）。それから都市の空き地は農地にします。「有機農業」なんていう必要はありません。化学肥料輸入できないんだから。石油は輸入できませんので、自然エネルギー発電のシェアは40%もある。医薬品も輸入できないので、医者を大量につくるしかない、教育を充実して医者をつくる。

その結果どういうことになるのか。今、アメリカ、カナダを抜いて南北アメリカで最も平均寿命が長い国は、キューバです。それから一人当たりの文化度、例えば「何回美術館や博物館に行くのか」といった統計をキューバは取っている。ではキューバはなんでそうなったかというと、遮断されたからです。

何かにつけて恐れる「こんなことをしたら株価が暴落する」なんて「だからどうした」って言えばいいわけですよね。怖がることは何もないんです。かえって、そのことによって新しい生活様式ができるんです。

全然まとまりのない話だったことをお詫びいたしまして、時間を大変オーバーしましたが、どうも、ご静聴ありがとうございました。